

# ”よみ“の世界を開く

日本人の根元的イメージ活動の触発として和歌〈俳句〉を読む

小林照子

佐々木恭子

## 授業の計画・照準

我々にとっての母国語（和語）は、日本人の感覚と音との結びつきによって生まれたものである。だから、子どもたちがより豊かな母国語を習得することの意味は、日本人の感覚をみかくことにあると言える。それは『上手な話し方』などと言って、ことばのやりとりのテクニックを教えることではない。子どもたちがはっとする瞬間。すなわち自分の体の中にある潜在意識に出会う瞬間をとらえなければ授業にはならないだろう。授業者は「ことばを習得することは感覚が目覚めることなのだ」ということを忘れてはならない。

子どもと一緒にはつとする。それも、潜在世界よりも現実世界に生きようとしている、高学年の子ど

もたちと一緒にである。日本人の言語生活を探って行くうちに”よみ“という活動が浮び上がってきた。潜在意識との出会いを五・七・五あるいは五・七・五・七・七のリズムで音声化するといった言語活動は日本特有のものであるにもかかわらず、小学校国語教育の中ではほとんど取り上げられていない。子どもたちの体の中に日本人の感覚が生きていれば、

”よみ“は、きっと楽しく快い言語活動であろう。以上が今回の授業を計画することになった経緯である。季節の句をとらえ、「ただいま」という窓口から、自分の意識世界を感じとれるような授業をするわけである。相手の腹が”よめた“というのと同じように、自分の意識活動がどういうものであるかわかったときに、”よむ“ということの実感が得られるに違いない。それは、目をさましている状態であるという実感でもある。具体的には今が夏なので、夏をテーマにした俳句をよむということにな

る。夏というものの全体的な世界はどのようなものなのか、夏で最も強烈な印象は何かというところから入っていきたい。

### 1 授業案

一、日時 平成四年八月十日

午前九時三十分～十時三十分

二、宮城県牡鹿郡女川町立女川第二小学校五年

（男子十一名、女子十二名）、（佐々木恭子学級）

三、領域 言語操作性

四、児童の言語生態研究会会員によるティームティ

ーキング

五、授業テーマ”よみ“の世界を開く―日本人の根

元的イメージ活動の触発として和歌〈俳句〉を

よむ―

六、教材 俳句歳時記「夏」より選んだことば。平

凡社版「日本の意匠」よりカラーコピーを使用。

「夏を感じるもの」「夏を感じることに」「自然現象」を色別にして、一語々々カードにしたものを使用し

た。

「夏を感じるもの」  
オニヤンマ・カブト虫・カミキリ虫・セミ・カエル・クモ・カラスアゲハ・カ・力ばしら・クワガタ・ガ・トカゲ・ヘビ・キリギリス・ハエ・海ネコ・カマキリ・ネズミ・鱧・鮑・ガゼ(ウニ)・ペロ(平べったい魚)・イカ・山百合・昼顔・キュウリ・トミギ(トウモロコシ)・サザギ(インゲン豆)・夏大根・ウリ・朝顔・ヘビ苺・マツバボタン・ウド・ぼうふう(さしみのつまにする山菜)・麦茶・ソーメン・ふうせん・よしず・すだれ・ゆかた・うちわ・げた・ふうりん・かやり火・キュウリもみ・ナスづけ・ちようちん・らくがん・わたあめ・みつば・たらのめ・むぎわらぼうし

「夏を感じることに」

開口・盆・盆の市・夕立・雷・はもづり(夜づり)・漁火・草いきれ・蝉しぐれ・おほか・塔婆・盆おどり・潮騒・たこつば・水車・花火・昼寝「自然現象(変化)」土用入り・土用波・雲の峯・風ぐ(朝風)・しけ・おばり・ゆうれい

七、授業テーマ設定の理由

子どもたちが、日本の地に生まれ、育つ過程において「物が読め、書け、物が話せ、聞ける」という言語運用能力の発達は、その母胎としての物思うことの広がり、感覚の成長なしには考えられない。音声文字化されて辞書におさまると、ことばという個体として存在することは否定できないが、今生きている子どもの五感、この世に生まれる以前からも

っている潜在意識のよみがえりとしてのことばを考えないわけにはいかない。

和語は日本人の感覚の音声化によって生まれたものであるから、持つて生まれた日本人の感覚で素直に受けとめれば、音が音のまままで理解できるはずで、辞書を引かなければ理解できないのは、音に感覚が伴っていないことになる。古代から現代へ生き続けたきた音声言語、そのことばから発している印象、人の口から発する音声の連なりを扱わなければならない。

こうして日本人の言語活動の原点に立ち返ってみると、日本人の感覚及び潜在意識そのものともいえる言語活動「よみ」がある。ことばを操ることによって、もう一つの世界を構築される、一つの世界が広がるのが「よみ」である。「よみ」は先験的イメージ運動の発露といつてよい。歌をよむというのは、歌を作るということではない。人が死を前にした辞世の句にしても、潜在世界に入ることの意味しているし、世界転換を約束しようとするものであった。

子どもたちは潜在世界から離れようとはしていない。私どもは活動するイメージの最先端で生きていることを示す数々の事例を知っている。子どもたちにとつて、おそらく歌をよむ俳句を作るということは初めての行為であろう。但し、よむことの日本人的潜在性に思い至るならば、子どもたちの根元的イメージ活動は、必ず最短小詩型としてのイメージ限定として、この俳句のイメージとは重なると思うのである。もちろん私たちは俳句を作るという意識よりも自分の意識の活動の発見こそが重要なのだという指導をしなければならない。

俳句の命は歳時性であるといわれる。私たちはこれを方法として逆手にとる。時々刻々の変化への感

度を問わなければならない。イメージの句を捉えることを第一の条件とする。日本人の言いならしけた「只今」というそれは、時間・空間の限定の習練ではなかったか。この時空の設定にテーマを取る時与える時、世界となる。これが第二の条件である。これをもし、イメージ世界の構成だというなら、物と事とのとり合わせだといつてよい。これが第三の条件であろう。

私たちは本授業を実施するにあたり、歳時記から子どもたちの潜在意識世界を刺激すると考えられる夏の季語を取り出した。子どもたちの意識世界を分解して示してやったことになる。子どもたちは、この言葉の取り合わせとテーマによって、意識世界を意識し直すことになるはずである。

八、指導計画(一時間扱い)

九、本時の目標 日本人の根元的イメージ活動の触発として、うたをよませる。

十、本時の展開

学習活動	指導上の留意点
①学習開始のあいさつをする。	指導上の留意点 うたをよむということ、人間のイメージ活動について
②今日の学習についての話(上原先生から)	
③夏を感じるものをあげる。	(もの) 百合・かまきり・か・せみ・よしず・うちわなど
・植物 ・動物 ・その他	
④夏を感じることをあげる。	(こと) 夕立・開口・蝉しぐれ・草いきれ・花火・昼顔など

<p>⑤夏の自然現象（変化）をあげる。</p> <p>⑥うたよみの世界を示す。</p> <p>1. 名句・名歌を示す</p> <p>●古池や かわずとびこむ 水の音</p> <p>●夏草や 兵ものどもが 夢のあと</p> <p>●松蔭や ござ一枚の 夏ざしき</p> <p>2. 絵を見せる</p> <p>・淀の川瀬と水車</p> <p>・とうもろこしとかみ切り虫・とうもろこしとせみ・うりとかまきり・きゅうりときりぎりす・ちようちんとおばけ・へびとろくろつくび</p> <p>3. 名句を示す</p> <p>●ありの道 くもの峰より 続きけん</p> <p>⑦うたをよむ</p> <p>1. とりあわせをする</p> <p>（学習③と④をあわせる）</p> <p>2. 題目を指定してうたをよむ</p> <p>・夏の海</p>	<p>（変化）土用波・しけなど</p> <p>題目と作者</p> <p>（古池）（芭蕉）</p> <p>（夏草）（芭蕉）</p> <p>（松蔭）（一茶）</p> <p>「日本の意匠」より抜き出した作品のカラーコピー</p>
--	---

<p>・すずしき</p> <p>・夏の朝</p> <p>3. 時間決定・空間決定をして、うたをよむ</p> <p>（学習③と④に⑤を加える）</p> <p>⑧学習おわりのあいさつ</p>	<p>人事をとらえて五・七五の型にしても、それはうたとはいえないことを押える。</p> <p>（うたになつてない例）</p> <p>●とんぼとり なごりおしげに かごをあけ</p> <p>●雷の 光とともにへそ押さえ</p> <p>●オニヤンマ むれにまぎれて 夏はいく</p> <p>（第一の条件として、イメージの句をとらえることを考えてうたをよむ）</p> <p>⑤の自然現象（変化）を加えることにより、</p> <p>”只今 “（旬）をうたう。</p>
---	---

十一、評価 日本人の根元的イメージ活動の触発としてうたをよむことができたか

## 2 授業記録

UT <あいさつ>

今日は夏休みなのにみんなに出て来てもらって、そしてみんなと一緒に勉強してみようということ、で遠い所から先生たちもかけつけてきた。素晴らしい所だね、女川という所は、みんなの顔を見てなかなか立派だなと感心している。今日はね、お

そらく日本中で五年生の子供たちが初めて勉強することをやってみようと思うんです。じゃ、どういふことをやるのだろうということになるのだけれども、”うた”を作ってもらおうと思うんだ。だけだね、これから問題なんだよ。”うた”を作るというのはどのくらい難しいのかということなんだけれどもね。なかなかそう簡単に作れるものではない。それから、この上原先生がいうことを、本当によく、しっかりと聞かないとダメよ。いいか、初めてやることだしね。君たちがやっていく間にね、どんどんわかってくる、必ずわかってくると思う。まず一番最初に、先生は”うた”を作るって言ったけど、だけど歌は作っちゃいけないの。だから、これから皆さんは”うた”を作るんだけど作っちゃいけないの。じゃ、できないじゃないか。そうじゃない。”うた”は”よむ”。”うた”はよむんだよ。だから今日は”よむ”ことの学習をする。今までやったことあるかね。”よむ”ことの学習は。小学校入った時から”よむ”ことをやっている。しかし本当の”よむ”ことはやっていなかった。今日、初めて本当に”よむ”ことをするんですよ。君達は”よむ”というのは「文章を読むんだろう」とか「書いてある言葉を読んでいくんだろう」とか、そんなふうには覚えてただろうと思う。だけれどもね、本当はそうじゃない。”数”をよむ”ということとは知っているね。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十と。それを”数”をよむ”と言うだろう。それが”よむ”なの。だから、”うたをよむ”というのはね、頭の中に本当は入ってしまっているものを引っ張り出すことなの。さあ次に大事なことを言うよ。この”よむ”ということとはね、君達の先祖、

お父さんお母さんおじいさんおばあさんそのおじいさんおばあさんのお父さんお母さん。ずっと昔から、遠い遠い昔から君達の先祖がこの女川に住んだ、それよりもっと前かもしれない。ずーっと日本人はうたをよんできたんだ。だから日本人はうたがよめる。君達だつてうたをよむことのできる頭を持っている。ただし、うたは作らないんだ。うたをよむんだ。だからね、自分の頭の中にね、いつの間にか入っていたものを引っ張り出しさえすればうたはよめる。あんまりいい例ではないけれどもね、さあ、いよいよこの世とはおさらばだ、明日おれは死ぬんだという時になるとね、日本人はうたをよむんだ。会津若松っていう所知ってるね。あそこでは明治になる時、大変な戦争が起きた。そして会津城はその時落城する。ある家老さんの家族にはたくさん女の子がいた。敵にせめられるたびにみんな自決する。自決するということは自殺したのね。家族全員が一つの部屋で、のどをついたり首をついたりそして死んでいったんだよ。その時全員がうたをよんでいるんだよ。一番下の子っていうのは五つか六つだったと思う。その子たちまでもがうたをよんでいる。おじさんだつてうたをよんだ。それは戦争に行く時ね、生きては帰って来れないっていうのでその時にうたをよんだ。兵隊さんに行く前にちゃんとうたをよんで用意をしておく。昔の日本人はそういうことができた。それがうたをよむっていうことなんだ。みんなできるんですよ。文章を暗唱して、それをよみあげる、それがよむんだ。頭の中に全部入ってしまっているやつを出す。だから作っちゃいけない。作るんじゃない。

C  
はい。

UT  
ちよつと待つてね。作つてはいけないんだよ。

作つたら嘘になつてしまうから。だからよみさえすれば嘘は出てこない。ということなんだ。じゃなんで死ぬ時にそういう歌をよんだのかというと、それは神様とか仏様にそのうたを捧げるものであった。よむというのは、そういうことの場面のためにやつていた。さあ、この辺はどうか知らないけれども、日照りで田畑に水がない雨がふらないという時にはね、みんな雨乞いということをした。その時にうたをよむ。そしたら神様が雨をかせしてくださるだろうっていうふうに思っていた。そんなことまでもやっただ。

—板書—

C  
神や守るらむ。

UT  
そうそうそうそう。

C  
はい。

UT  
はい、よめた。

C  
こころ

UT  
こころ

C  
だに

UT  
そう

C  
まことの道にかないなば、いのらぬとても神やどるらむ

—板書—

心だに まことの道にかないなば  
祈らぬとても 神やどるらむ

UT  
そう。ね。神様どうぞ助けてくださいというふうにしないで、自分の心が誠であつたならば、

神様がちゃんと守ってくださるといううたをよんでいる。

C  
はい。

C  
このうたも作つたんでしょ？ そしたら嘘でしょ。作つたんだつたら嘘でしょ。

UT  
いや、これはよんだんだ。これはだれが作つたかわからない。ところが昔の人はみんなこのうた

を知っている。どんな本を読んでも、このうたはだれが作つたかわからない。さあ、そこでね、次に話を進めるよ。今、阿部君は作つたからここにあらつて言つたんだが、今日の勉強は、君達に作つてほしいんじゃない。よんでほしいんだ。頭の中に何が入っているかということを君達がよく考えてみてほしい。そしたらそれがそのまま出てくる。そういうことをやつてほしい。そしてね、その証明を一つしてみたい。阿部君は文句言つたけどね、このうただつて作つたからあるんじゃないかって。だけれども、作らなくても、君達は毎日ほとんど毎日うたをよんでいるんだよ。それは何かっていうと、夢を見ていることなんだ。君達は、毎日見る夢を作っているか。中には、今晚こういう夢が見たいなあと思つて見られたということがある人もいるかもしれないけれども、ほとんどそれとは関係なく、夢は出てくるだろう。だから今日はね、君達は寝ていないけれども、目を覚ましている時に頭の中でどんな夢を見ているのかっていうことを引っ張り出してみたい。そういう勉強をしてみたい。そうするとちゃんとうたをよむことになるだろうというふうにおじさんは思っている。さあ今日やることはどういうことかわかったね。あのうたを見ると、五・七・五・七・七という形になっているんだね。

C  
俳句

UT  
君はよく知ってるね。俳句なんて言つたね。五・七・五・七・七。これは俳句じゃないんだね。

和歌というんだね。和歌ってこういう字を書く。大和の人は子どもからおじいさん、おばあさんからみんなその歌をよんでいた。大和っていつたら日本だね。日本人はこういう形で歌をよんでいた。

五・七・五・七・七に合わせてもまなければなら  
ないというふうには統治されていたわけではない。

よむと不思議に五・七・五・七・七という形にな  
ってしまふ。それがもつと短くなつて五・七・五  
になると、阿部君が言つた俳句になる。だから今  
日は、五・七・五・七・七まで行かないで、五・  
七・五で止めてしまふ。五・七・五で、君達の頭  
の中でうかんでいる夢を引っ張り出そうというわ  
けだ。

C 俳句つて、季語がないとダメなんじゃないの。  
季語。

UT 君はよく知ってるな。本当によけいなことまで  
知っているね。すごいことを言ってくれた。そう  
言ってくれるとおじさんは楽なんだけどね。でも  
君達は夢の中で、今日の夢の季語は何だつたけな  
んでやらないだろう。阿部君は季語を知っている  
んだつたら季語から入っていいことにしよう。季  
語ってどういうことなのか書けるかね。

C 季節の季に語でしよう。

UT すごい、すごい。そう季語、語、これは言葉つ  
て言うんだね。そう、季節の言葉だ。だから夢の  
中には自然に季節が入っているということなんだ  
よ。日本人がうたをよもうとしたら、必ず季節が  
入るということなんだね。阿部君は季語を知つて  
いるんだから、季語を使つてうたをよみなさい。

他の人も、だんだんに、あ、それが季語という  
んだなあとかわかつてくると思います。おじさんね  
ここに来る時、電車に乗つて、そして松島を越  
えた。そしたら松島を越えて奥松島にかかつてき  
た。その時にそのまわりの景色を見て、ふと思  
い出した。うたが出てきた。おじさんが作つたの  
ではなくて、知っているうたが、はあつと出てき

た。書いてみようか。

—板書—

このうたがね、すうつと頭の中に出てきた。あ  
まり海がきれい、そして空は台風が去つた後だ  
つたから、なおさらだつたんだろね。向うに雲  
がウワーツとわきおこつて、そしたら、フツこ  
のうたが出た。

—白鳥は悲しからずや空の青  
海の青にもそまずただよ—

ね。わかるだろう。何か、わかる気がするでしょ  
う。皆さんの中にその情景がフーツと浮かんでい  
ると思う。こういう風にしてうたをよまなくちゃ  
いけない。作るんじゃないで、よまなくちゃいけ  
ないよ。じゃあね、もう一つ考えましよう。次に  
大事なこと。うたをよむ。つまり、君らが夢を見  
る夢は、どんなふうにして頭の中に描かれていく  
んだらうということ。簡単だ。夢の研究している  
と思えばいいんだ。どんな夢を見たて言うよね。  
どんな夢かわからないとうたはよめないね。想像  
力つてわかるかな。

C 自分が考えたこと。

UT 自分の考えを想像力というの？

C 何かを想像する。

UT その想像力つてどういうこと。

C 思う。

UT はい、思うことつていうのはどういうこと？

C ……

UT ここに書いてあるんだよ。ほら、思うというの  
はこれだね。これは像。像つていうのは、

C 鼻の長いやつ？

UT それはにんべんのつかないやつだね。

C こうやってるやつとか。

UT あれはぞうつてやつだ。

C 銅像でしょ。

UT 今、君が思ったでしょ。何を思ったか、思いの  
中に出てきた形が像だよ。

C 形

UT うん、姿なんだ。思うものがぼーっと浮かんで  
くるものが像つて言うんだ。映像つていうのは像  
が映ること。だから我々の頭つていうのはね、必  
ず像が浮かぶようになってるんだ。つまりそれ  
をイメージつて呼んでいるの。みんなが夢をみる  
つていうのはその働きなんだ。頭の中で映画をみ  
るようなことだろう。だから今日は、今から夢を  
みてくれればいいんだよ。よむというのには想像す  
ることだつてわかつたね。だから像を出さなくち  
ゃいけない。夢をみるように、頭の中に映画が映  
るようによむんだね。何が浮かぶかな。もう浮か  
んできたかな。まずね、みんながこれからよむ  
たはこれに限つてくださいつていうふうには整える  
よ。それがさつき出てきた季語ということになる  
んだからね。夏のまっさかりということでもう。  
夏のまっさかりつて言つたら何が頭の中に浮か  
んできたか。まず、それを言つてもらおう。想像す  
るんだ。夏のまっさかりつて言われると何を思い  
浮かべるかな。

C かき氷。

C 花火。

C 海。

C すいか。

C 海。

UT 頭の中にぼーっと映画が出てこなくちゃダメだよ。  
旅行。

海。

やっぱり海が多いなあ。

扇風機。

うん、人と違うこと言ってるうなんて、あんまり苦労しない。本当に正直に。これから君達は夢をみなくちゃいけないんだから。

盆おどり。

肝だめし。

海。

風鈴。

台風と甲子園。

何？

台風と甲子園。

台風と甲子園。

うん。

うーん。すごいなあ。これでいいんだね。台風と甲子園。

プール。

海。

はい。いいか。一人だけ答え方が違ったのね。彼だけなんだよね。ずうずうしいんだ。

ずうずうしい。

二ついつべんに言っちゃったんだね。ところがね。今、海って言った人はね、自分の頭の中に像が出てきた。海がばあーっと出てきた。でもそれだけではうたはよめないの。もう一つ何かをくつつけないとうたはよめない。

青空。

だから阿部君が『台風と甲子園』って言っただろう。『台風』と『甲子園』が関係していることよってうたになってくるわけ。だから他の人も阿部君のようにね、海ともう一つ。

青空。

そしたら、海と青空っていうふうになって来るとうたになる。さっきおじさんがうたを書いただろう。海と空と。うたにはそういう仕組みがあるってことがわかるんだね。

太陽。

はい、くつつけましょう。

風鈴

扇風機と風鈴だつて。

かき氷と氷。

シロップ

すいかと種

蝉と虫

ちよつと気をつけて。くつつけ方にね。阿部君は、台風と甲子園って言っただろう。他の人は扇風機と電気とかね。すいかと種とかね。まあ、そういうのも悪くはないんだけど、くつつけ方が違うからね。そしたら出来上がっていくものに違いが出て来るんだ。ちよつと考えると、台風と甲子園って、どこでむすびびっているんだらうって思うのに、彼は台風と甲子園が頭の中に出たのだから、そこで夢が、君達の頭の中でどんなふう

に出来上がるか問題なんです。正直にやらないとこれはできない。自分の想像力にうそをついてはいけない。想像力を曲げてはいけない。素直にやってみる。

盆おどりと花火。

肝だめしとお墓。

これもくつつけすぎだなあ。

蝉とプール。

まだ言っていない人は、自分が出した物に対して言いなさい。

かき氷とシロップ

これもくつつけすぎじゃないかな。それでもいいけないことはないけどね。

蝉と人間。

プールは水。

プールは水。

プールは石だつちゃ。

何でできているかっていう話と違うんだよ。じゃあ、こっちからだけだね。台風と甲子園をどうくつつけたのか。君の想像の中には台風と甲子園が浮かんだんだね。

だって毎年夏っていうと必ず台風が来るでしょう。沖繩っていえば台風が多いでしょう。

うん、うん、うん、うん。

夏って言えば甲子園でしょ。

甲子園に沖繩の学生が出て来るっていうこと。今年、出て来ないよ。沖繩水産出てこないよ。

そうだね。台風と甲子園。これは面白いくつつけ方だと思ったんだけどね。五・七・五に入れてみよう。さあこれでいよいよ挑戦だよ。盆おどりと花火も入れてみよう。

おいもすぐできたよ。

そうか、できたか。

盆おどりとおわりになれば花火なる。

ほらできた。五・七・五だね。阿部君はこっちで先によんだのか。じゃ他の人。負けずにやれ。何でもないことなんだ。じゃ、みんなが考えている間にね、おじさんや先生たちが用意していたもの見せようか。

わかった、わかった。

はい。きれいな色でしょう。『とうもろこしと紙切り虫』だね。これは『きゅうりとバッタ』だろ

うね。こんな素敵なのもある。これはね『水鳥』だ。淀川というところにねかかっていた水鳥だ。

これは『ちようちんおばけ』。今、お盆だろう。だから、夏って言ったら君はお盆って言わないかな。ほら『幽霊』ね。幽霊なんていないよなんて言う人もいるだろう。での夢の中には幽霊なんていっぱい出てくるわけ。

肝だめしなんか。

そう肝だめし。

いや、ちがうね夏深し。

夏深し。

墓場でやるぞ肝だめし。

うおー。すごいね。おじさん感心した。季語を知ってるだけのことあるね阿部君は。夏深しって

ことを知ってたんだもん。『墓場でやろう肝だめし』だけだったらうたにならないんだよ。だけでもこういう素材を、夏深しって感じで包んでしまう

すると阿部君のイメージはぴしとおさまる。この所はちょっと難しいところなんだけれども阿

部君はもう通過してんだね。こういうのを季語っていうんだけれどもね。じゃあ季語のはたしている役割は何かというと、我々が見た夢を、夢全体

を包んでしまっている。ちょっと難しいよ。人間の頭っていうのはね、ちょっと難しいけれど、何

これくらい、と思いたくない。『意識』。阿部君の頭

の中はこの意識がよく働く。意識というのは何かっていうと、この意というのは心なんだ。この識

っていうのは、つかまえるっていうことなんだ。

阿部君は、自分の心がどう動くかをつかまえることができるんだね。他の人もがんばれ。阿部君は、だからよく考えてね。君は本当にすごい力を持っている。自分の心がどう働いているかっている

を、ちゃんとつかまえることができるようになってる。うたをよむということがそれなんだよ。

心の働きをつかまえるということなんだ。人間はみんなこういう生活をしている。校長先生も、先生も、この周りにいる人たちもみんな心が働いて

いる人なの。そして、そういう生活の仕方をしてる。これを例にたとえろとね、日本家屋の形と同じになっている。家に入ると座敷があるだろう。

奥まった所に奥座敷がある。奥の座敷には

神棚。

そう、神棚がある。一番ちゃんとした部屋に行く

くと床の間を作ってる。床の間に土足で上がった

りしないだろう。そこは神聖な神様がいらつしやる場所である。お正月なんか、そこにお飾り物な

んかを置くだろう。そうなってるね。そして普通

は、床の間に神棚があるって言ったね。床の間には

何だか長いものがかかっているじゃないか。

かけじく。

かけじくがかかっているだろう。今日の場合、

阿部君のかけじくには『夏深し』と書いてあった

ということなんだよ。わかるかな。玄関があつて、

奥の間へ入って、又、奥の間へ入っていったらこ

こに床の間があるね。ここにかけ軸がかけてある。

そしてその全体をとりしまっている形になっている。

だから今日の阿部君のイメージ、想像力について

いうと『夏深し』っていうのがこう、とりしま

っている。だから、君達がこれから自分のイメージ

を引っぱり出すときに、今日のぼくのイメージの

一番奥の奥座敷にはどんな掛け軸がかかっている、

そこには何と書いてあるだろうって思ってもいい

んだ。それを季語って言ったりするの。あるいは

テーマとか題とか言ったりする。そして奥座敷へ

行ったら、よみの世界をひらくって書いてある。よむっていうことはどういうことなのかっていう

ことが書いてある。今みんなは、それに近付こうとしているんだよ。

よみて、あの世でしょう。

そうだよ。わかった？　じゃ、最後におじさん

が題を出す。この題、難しいけどがんばって、え

らいこと言うからね。じゃあすばらしいのを出そ

うね。

―板書―

雲の峰。

そう。これを題として出す。奥座敷には、『雲

の峰』って書いてある。さあこれを五・七・五の

形で、自分の頭の中に映像を出す。ちょっと書いて

みなさい。

先生、雲の峰って何？

何だと思わない。

てきとうに思えばいいの？

そうそう。てきとうに思えば、うん。

雲の峰かけ声かけて。

雲の峰盆おどり。

できた。

できたか。早いね。君は早くできたからもう一

つ書いてごらん。ちょっと、おじさんヒントを出

すよ。神様に信号を送ろうと思いたくない。

神様に。

神様に信号を送るんだって思いたくない。そして

らでできるから。神様だけわかってくれればいいや

って。次々書ける人はどんどん書いてみる。夢を

見ればいいんだって教えただろう。こういう句を

よんだ人がいた。神の道雲の峰より続きけん。君

たちは、どんな句をよむか。雲の峰だけではでき

ないよ。もう一つとってこないと。

C 四つめ。

C あー、先生わかんね。

UT わからんことはないだろう。君の夢をひっぱり出せ。君の頭の中にある夢は、どういう夢なんだ。

C 雲の峰 かみなり様がすむところ。

UT おー、いい、いい。いいじゃないか。そう。みんなだいぶわかってきたみたいね。自分の夢をいっばい出す。日本中でこんな授業したのはじめてなんだから。では、あいさつ。

C 起立、注目、礼。

―「雲の峰」というテーマで授業中に子どもが書いたもの―

おくおくへ やつと見えたぞ 雲の峰

かみだなの かけじくあけば 雲の峰

雲の峰 歩け歩けど みいだせぬ

いいてんき ドアをあければ 雲の峰

はしごあり そこをのほれば 雲の峰

雲の峰 かんじ書かされ みいだした

(阿部広彦)

雲の峰 かぜにながれて 夏の空

神の道 おとも風と 雲の峰

(林 恵理)

雲の峰 深い山での うすいきり

雲の峰 山はみどりに 海は青

雲の峰 心の中を いやす雲

(植木由理)

雲の峰 空のはてまで つづくけむ

(阿部幸乙)

雲の峰 天からみてる 雲の神

(堂賀美保)

雲の峰 のぞいてみれば おくふかし

雲の峰 いけばいくほど 近づいて

(横江典昭)

風のせい ゆっくりうごく 雲の峰

(阿部英子)

雲の峰 カラスも鳴けば とりになる

(鎌田典之)

雲の峰 大雨ふれば かみなりだ

(今野奈保子)

雲の峰 かみなりさまが すむところ

(霜山勝之)

雲の峰 くものすこわれたら またすをつくる

(石田 修)

ゆうがたに からすがとべば 雲の峰

あべきよう子 かんじやらねば すぐおこる

(遠藤竜二)

雲の峰のみ書いて終わってしまった者八名

## 授業後の課題

授業者は「作る」のではなく「よむ」のだという構えに導くために多くの時間を必要とした。元気のいい阿部君は「心だに まことの道にかなないば祈らぬとても神やどるらむ」を呼んだ授業者にむかって、「それだっただれかが作ったんじゃないか。」と食い下がって来た。そこで「このうたは誰が作ったかわからないのに日本人ならだれでも知っていたんだ。」ということ話をすると、うーんとうなづてしまった。このように授業者の問いかけに最初から積極的に反応していた阿部君は、よみの構えをつかまえるやいなや、次々と楽しそうにうたをよみ始めた。そして授業中の発言が多くなった子どもも、雲の峰というテーマが出されると、すんなりとうたをよむ

ことができた。「よむ」という構えに入るまでの抵抗が大きかったことは確かだが、一度、そのことがわかった子どもの反応は良く、自分の心の働きを引っぱり出すことを楽しんでるように見えた。それだけに授業中、一句もよめずに終わってしまった子どもがあつたことは残念である。

今回はよみの世界の入口に立つことで授業の大部分がついやされてしまい、「ただ今」の時点をとらえるというところまで絞りこむことができなかった。阿部君が出した「台風と甲子園」も、時間空間のとりあわせ方に興味を引かれるものであったのだが五・七・五によむところまで行かなかった。自分の心の働きをつかまえる際の世界定めには、時間と空間の限定が必要であるという点を、もつとていねいに扱わなければいけない。子どものイメージ世界の時間性空間性がどのようなものであるのかという問題として今後も研究を進めて行きたいと思う。

小林 (日野市立南平小学校教諭)  
佐々木 (宮城・女川町立女川第二小学校教諭)

